

The Role of DNA Repair Glycosylase OGG1 in Intrahepatic Cholangiocarcinoma

坂田, 一仁

<https://hdl.handle.net/2324/4495960>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	坂田 一仁
論文名	The Role of DNA Repair Glycosylase OGG1 in Intrahepatic Cholangiocarcinoma
論文調査委員	主査 九州大学 教授 中別府 雄作 副査 九州大学 教授 小田 義直 副査 九州大学 教授 中村 雅史

論文審査の結果の要旨

様々な癌腫における酸化性ストレスの影響がこれまで報告されてきたが、肝内胆管癌（ICC）においてその影響は未だ不明瞭である。申請者の研究の目的は、酸化DNA損傷とその修復酵素がICCにどのような影響を与えるか明らかにすることである。ICC患者63名の切除標本にて8-hydroxydeoxyguanosine（8-OHdG）と8-oxoguanine DNA glycosylase（OGG1）を免疫組織化学染色にて評価した。OGG1の低発現は、腫瘍の深達度T4（ $P = 0.04$ ）、静脈浸潤（ $p = 0.0005$ ）、リンパ管浸潤（ $p = 0.03$ ）、神経周囲浸潤（ $p = 0.03$ ）との関連を認めた。また、OGG1高発現群と比較して、OGG1低発現群は予後不良であった（全生存率： $p = 0.04$ 、無再発生存率： $p = 0.02$ ）。OGG1とは異なり、8-OHdGのレベルは、予後と関連を認めなかった。以上より、酸化DNA損傷と、DNA修復酵素であるOGG1は、ICCの進展および予後に関連する可能性が示唆された。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えたものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが、概ね適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。